

---

# 月の桂 4

cassander

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月の桂4

### 【Nコード】

N8629T

### 【作者名】

c a s s a n d e r

### 【あらすじ】

姫の父が急死する。これで姫は自由の身となった。これで恋も許される事になった。相手は？

月見の宴までもう三日という夜、お父様が病に倒れ、あつという間に亡くなつてしまい、私達が女御様の元に伺う事は愚か、女御様の里下がりも暫く控える事となつた。お父様の代わりに太郎兄上が、女御様の離宮を急遽造営する事となつた。喪中の家では御子様を産む事はできない。自然私の入内の話も立ち消えた。お父様の後ろ盾が無くては、叔母様の御子様も皇太子に立てて差し上げる事さえ危うい。その年は喪の中に暮れたので、冬は暗く長く厳しかった。そのためか叔母様の女御様は流産なされた。太郎兄上と二人の兄の落胆は激しかった。式部の君は我が家を出て、実家に戻られた。私の入内が立ち消えた以上、教育係は必要ないという事だった。これで、少将様との夢いつながりが絶えてしまふのが悲しかった。式部の君が最後の講義で、いつもとは違って甘い和歌を幾つも教えてくれた。美鳥、秋枝、多恵、智恵、みんな乙女らしい憧れを胸一杯にして聞いた。特に秋枝は恋をしているようで、涙ぐんばかりだった。

「姫君も、いつかきつとこのような和歌をご自身が詠まれる事でしょう。真正面から事に当たられる、あなた様のご性格を大変貴重な物と思いますけれど、どうぞご自身を大切になさいます。人のために自分の幸福を捨ててはなりません。きつと亡きお父君も姫君の幸せが一番大切だと思ひですよ」

それで、式部の君も本当は決して幸福ではないのだと悟つた。それ以来式部の君に会う事はなかったが、途切れ途切れに文の行き来はあつた。噂では、その後暫くしてから、結婚して夫と一緒に伊予へ下つたそうだ。あの教養高い典雅な方が、都を離れるには、きつとそれ程の訳があつた事だろう。余程深く心に決めた事がなければ、あの方が田舎に住む事など想像もできない。美鳥と二人だけの時に、あの夜の少将様と式部の君の事を話しあつた。

「どうして式部のおもとは、姫君がご自分を大切にしていないといわれたのでしょうか」

それは私にも不思議な事に思えた。私自身、我が儘ではないが、自分を犠牲にしているとも思わない。お父様の喪が明けたら、私には普通の姫たちと同じ生き方ができるようになるのだ。あの日、美鳥と少将様を垣間見しようと決めた時に戻れる。お父様には申し訳なく思いながらその日を待ち、密かな開放感を味わった。

年が明け、春になって、梅が咲くと、叔母様が内裏に戻られた。それから初夏に、再度叔母様の懷妊の知らせがもたらされた。もう私には関わりの無い事と聞き流して、ゆつたりと時間が過ぎていった。多恵や美鳥と、式部の君の教えてくれた和歌を口ずさんだ。心の隅にはいつもあの夜の少将様の事があった。文も来た。文字を見るとその書き手の心根まで分かると式部の君が教えてくれたのを思い出して、じっと見詰めた。ただ整っただけの魅力のない文字で書いてあった。

「・・・多摩川にさらす手づくり　さらさらに  
何そこの児の　ここだ愛しき・・・」

なんという事でしょうか。あなたの美しいというお噂を伺うだけで私はもうあなたを恋して悩んでいるのです」

歌も他人の歌で、その書体も気に入らない。文をしおりで叩いてみると、多恵が笑った。

「気に入らないのですか」

「殿方がこのようなくねくねとした文字を書かれるのは、本当に好きになれないわ」

「この方は美男で有名な大臣の次郎君ですよ。六位でも蔵人でいらして、みんな何とか文の一切れでも欲しがっています」

「お目にかかった事も無いのに、何故私を好きだと言えるのかしら」  
「お目にかかってから、好きになるか嫌いになるかを、決めればい

いのですわ。女房方が、お目にかかると意外に普通の人だったなどと、よく言っていますよ」

多恵は、ませた少女らしく大人達の恋の噂を知っていた。

「多恵は何でも知っているのね。秋枝、知恵、美鳥も、みんな知っていたの」

「北の対から、まだ夜の明けないうちに出て行かれる殿方が、何人もおられますよ」

秋枝が年かさなだけあって、真っ先に言った。美鳥も多恵も、頷いた。屋敷の中で、そんな事があるのを知らないのは、私だけだった。「お母様にこの文をお渡しして」

みんなが不満そうな顔をした。秋枝がお母様の所に文を届けに部屋を出た。残った美鳥とはちらつと視線が合った。美鳥がわけ知り顔にかすかに頷くので、わざと横を向いた。

「まだお父様のご冥福をお祈りしたいのよ」

急いで経文を開けたが、自分がしおりで文字を叩いているのに気付いた。何故少将様の月にキラキラ輝く直衣の事を思いだすのだろう。

「少将様が女御様に従って来られたら、今度はお話なさいませ」

美鳥が言った。大臣の次郎君など、あの少将様と比べる訳にはいかないと、二人で笑っ

（後書き）

少将からふみはくるのか。二人はいつになったらあえるのだろうか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8629t/>

---

月の桂 4

2011年10月9日04時46分発行